海洋政策文化学科　フレッシュマン・セミナー

レポートの書式

基本事項

40字×36行、余白は上35mm、左、右、下、各30mm

読点には「 、 」を、句点には「 。 」を使用する。

文体は「～だ」、「～である」調で統一する。

題名

最初の行に題名を記す。副題をつけてもよい。

副題をつける場合、題名と副題の間に2倍ダッシュ（――）を入れる。

文字は12ポイント、太字、MSゴシック。

氏名

文字は10.5ポイント、太字、MSゴシック。

(1)班別レポートの場合

　　題名の下に1行空けて、中央寄せで班名、学籍番号、氏名、執筆担当箇所を記す。

　　学籍番号と氏名の間に半角スペースを入れる。

(2)個人レポートの場合

　　題名の次の行に、右寄せで学籍番号、氏名を記す。

　　学籍番号と氏名の間に半角スペースを入れる。

本文

氏名の下に1行空けて、本文を書き始める。

大見出しの番号にはローマ数字を、小見出しの番号にはアラビア数字を使用する。

見出しの文字は10.5ポイント、太字、MSゴシック。

文章の文字は10.5ポイント、MS明朝。

図表

図表の下に、題名と出典を記す。出典は、著者の苗字、出版年、引用ページのみを記す。

図と表を区別し、独立に番号を振る（例：「図1」、「図2」、「表1」、「表2」など）。

図表の題名の記載は10.5ポイント、太字、MSゴシック。

出典の記載は10.5ポイント、MSゴシック。

書籍やweb上などに掲載されている、著作権のある写真やイラストは使用しない。

注

書籍や論文から引用する場合、文末脚注を使用する。

注の番号は、アラビア数字を使用する。

脚注には、著者の苗字と引用ページのみを記す。

日本語文献からの引用は「〇〇ページ」、英語文献からの引用は「p.〇〇」と記載する。

複数のページにまたがる場合は、「××～△△ページ」、「pp.××-△△」と記載する。

同一の著者による文献が複数ある場合には、苗字の後に出版年を括弧に入れて記す。

web上から取得したPDFファイル等にページ番号がある場合は、引用ページも記す。

引用文献

文献は、著者の氏名の五十音順に並べる（英語の文献の場合は氏名のアルファベット順）。

著者の氏名、題名、出版社、出版年の順に記す。

書籍及び論文の掲載媒体の題名は二重カギ（『　』）、論文の題名は一重カギ（「　」）で括る。

題名と副題の間は2倍ダッシュ（――）でつなぐ。

初版とそれ以降の版が存在する場合は、使用した文献の版を記す。

邦訳文献を使用した場合には、著者の氏名の後に訳者の氏名を記す。

引用した論文が書籍に収録されている場合、当該書籍の編者や書籍名も記す。

引用した論文が雑誌や学術誌に収録されている場合、その名称と巻数も記す。

英語の書籍及び論文の掲載媒体の題名は斜字体にする。

英語の論文の題名は引用符（“ ”）で括る。

同一の著者の文献が複数ある場合、出版年の古い順に並べる。

書籍や論文が複数の巻に分かれている場合、引用した巻を記す。

同一の著者の同一の出版年の文献は、五十音順、アルファベット順に並べる。

その場合、文献を区別できるように「〇〇年a」、「〇〇年b」と表記して区別する。

web上からの引用の場合、URLと閲覧日を記す。

詳細は、以下の見本を参照。

（班別レポート・見本）

**日本の捕鯨の現状と課題――和田漁港を事例として**

**6班　151113 〇〇〇〇（担当：Ⅰ-1、Ⅲ-2）、151126 ××××（担当：Ⅱ-2）、**

**151127 □□□□（担当：Ⅰ-2）、151134 △△△△（担当：Ⅱ-1）、**

**151136 ※※※※（担当：Ⅲ-1）**

**Ⅰ．人間と動物の生存権**

**１．自己決定権とは何か**

　近年、捕鯨問題が「動物の生存権」という観点から論じられることが多くなってきた。動物の生存権は、人間の生存権と、どのような点で共通し、どのような点で異なるのだろうか。生命倫理学では、人間一人一人が自分らしく生きることの権利を「自己決定権」と呼ぶ。その基本原則は、「判断能力のある成人の場合、自身の生命、身体、財産等に関して、たとえ当人にとって不利益な決定を下したとしても、結果として他人に危害を及ぼすことにならない限りは、その決定を認める」というものである[[1]](#footnote-1)。　（略）　この点について、倫理学者のジョン・スチュアート・ミルは、能力の成熟している人だけに対して、原則を適用すべきだと論じている[[2]](#footnote-2)。　（略）　このような場合、当人に強制したり、何らかの害悪をもって報いたりする十分な理由にはならないと、ミルは述べる[[3]](#footnote-3)。

**２．〇〇〇〇〇**

　以上において、生命倫理学における自己決定権について論じた。　（略）

**Ⅱ．×××××**

**１．△△△△△**

**Ⅲ．※※※※※**

**引用文献**

（個人レポート・見本）

**現代社会における水族館の位置づけ**

**151113 〇〇〇〇**

**Ⅰ．はじめに**

　現代では、かつてと比べて人々が自然と触れ合う機会が減少していると思われる。　（略）例えば、かつては東京湾にも豊富な干潟が存在していた（図1）。しかし、近代化が進むにつれて、その状況は変化していった。　（略）

図

図1　東京湾の干潟開発（大熊、23ページ）

**Ⅱ．近代社会の特徴**

　現代社会の日常生活は、専門家システムによって成り立っている。それは、科学技術上の成果や職業上の専門家知識の体系のことである[[4]](#endnote-1)。 （略）

**Ⅲ．水族館に期待される役割**

**Ⅳ．おわりに**

**引用文献**

（引用文献欄・見本）

**引用文献**

大熊孝『技術にも自治がある――治水技術の伝統と近代』農山漁村文化協会、2004年。

加藤尚武『環境倫理学のすすめ』丸善ライブラリー、1991年。

加藤尚武『現代倫理学入門』講談社学術文庫、1997年a。

加藤尚武『20世紀の思想――マルクスからデリダへ』PHP新書、1997年b。

川本隆史「功利と正義――J.S.ミル『功利主義』第5章をめぐって」、小倉志祥（編）『近代変革期の倫理思想』以文社、1986年。

環境省「平成14年度　東京湾の干潟等の生態系再生研究会　概要版」

　http://www.env.go.jp/press/files/jp/4653.pdf　（閲覧：2015年8月1日）

甘蔗珠恵子『まだ、まにあうのなら――私の書いたいちばん長い手紙［増補新版］』地湧社、1996年。

桜井徳太郎『日本のシャマニズム――民間巫女の伝承と生態［上］』吉川弘文館、1974年。

森岡正博「現代において哲学するとはどのようなことなのか」、『哲學』第50号、1999年。

Giddens, Anthony. *The Consequences of Modernity*, Stanford University Press, 1990.

J.S.ミル（著）、塩尻公明／木村健康（訳）『自由論』岩波文庫、1971年。

Weinberg, Alvin M. “Science and Trans-Science,” *Minerva*, 10, 1972.

1. 加藤（1997a）、167ページ。 [↑](#footnote-ref-1)
2. ミル、25ページ。 [↑](#footnote-ref-2)
3. 同上、24ページ。 [↑](#footnote-ref-3)
4. Giddens, p.27. [↑](#endnote-ref-1)